

株式会社 華光

事業内容：放電加工の電極製造メーカーから始まり、極細金属パイプや精密パイプなど、金属パイプ製品を幅広く展開している。

創業：61年



代表取締役社長 木田 和寿さん

■長寿の秘訣や大切にされている考えなどをお聞かせください。

60年という道のりは弊社にとって決して平坦ではありませんでした。私は、21歳のときから30年社長を務めていますが、就任した年は阪神大震災や、地下鉄サリン事件、バブルの崩壊など、激動の波に飲み込まれるような年でした。

そんな中を必死に生き残るために、製造技術を水平展開し、金型だけではなく、医療や半導体、航空宇宙など、様々な分野に多角化させていきました。

また、大量生産を行っている会社等が、できないと諦めてしまったような難しい案件も、諦めずの一つひとつ知恵を絞って解決していくというスタンスを持って率先して自社で引き受けるようにしています。

そうやって出来る分野を広げていくことにより、会社自体を強靱にさせてきました。

■従業員に対するマネジメントという面で、工夫されている点や、大切にされていることはございますか。

超放任主義です。もちろん私の方からアドバイスしたり、間違っている方向に進んでいけば止めることはします。ただ、基本的に彼らが彼らのペースでやっているものになるべく干渉しないようにしており、それができる、余裕のある経営にしています。

大事なのは「遊び」や「たゆみ」の部分です。例えば、製造する物が決まっている現場などでは、トヨタ生産方式のように効率を求めることは不可欠かも

しれません。しかし、効率性のみで張り詰めてしまうと、効率的な現状を神格化してしまいドラスティックな判断を躊躇してしまったりします。成功体験がイノベーションの一番の障害となる一例だと思います。

それよりは、生産数が例え落ちようとも「遊び」や「たゆみ」を作ることで、あまり気負わずに他社がチャレンジできないことにチャレンジできるという自負があり、巡り巡って自分の糧になるという自己体験があります。

■時代や人の考えが変わっていく中で、“変化と維持”についてどのような考えを持たれていますか。

日本の高いホスピタリティがサービス業の成長を促していることに対し、製造業はどのようにして時代に対応していくのが鍵になっていると思います。

日本の製造業の強みは、技術力以上に「暗黙知」の存在にあります。言葉にせずとも伝わる共通の文化や価値観といった、日本人特有の“暗黙の了解”が多く、それらが品質を保つ仕組みとなり伝承されてきました。

しかし、時代や世代が変わっていく中で国内でもこの暗黙知自体が減少し、共通の言語による擦り合わせがしづらくなってきているという自覚があります。

そのため、暗黙知を維持できる環境を整えるべきなのか、欧米型の暗黙知に頼らないシステムへと変化するべきなのか。これらはどちらが良いとは一概には言えず、戦争やコロナなどの社会情勢によっても影響し、維持したいことも変化せざるを得ないこともあります。状況によってそれを見極めながら、戦略を組んでいく必要があると思っています。



製造工場の様子